

ネパールへ流入のブータン難民

幼い子どもが、母が、見えない明日を探し求めている。国連が推進する貧困撲滅の国際年(今年、毎日新聞社と毎日新聞社会事業団の「飢餓・貧困・難民救済キャンペーン」)で、貧困ゆえに苦しむネパールの子どもたち、ネパールに流入したブータン難民を取材した。この「知られる難民」は、大量流出から5年を経ても帰国のめどが立っていない。「帰りたい」という悲痛な叫びを聞いたが、その一方で、難民キャンプ周辺のネパール住民も救援を訴えた。私たちは、神大震災を機に、「助け合い」の大切さを学んだ。その心を今度は、病院づくりに協力することでネパールにも移したいと思う。

文・進見 新也
写真・懸尾 公治



明日を生きる
ヒマラヤのふもとから



国を追われ5年…キャンプであえく9万人

●医療
もしており、補助給食を出している。フルマヤさんもここで専門的な治療が必要と判断され、紹介を受けてキャンプ外の病院でレントゲン撮影。治療を受けた。薬などはすべて無料。一薬をもらって「安心です。言葉のわりに、笑顔が弱々しい」。

4年前に家族で逃げたが、夫が病気で10カ月前に亡くなった。6歳の女の子には健康診断センターに17カ月の三友カンガちゃんに乳房をふくませている。どことなくカンガちゃんは元気がない。聞けば、フルマヤさんの結核が感染したという。

弱々しく母の乳房をふくむカンガちゃん。生まれながらに母の病む結核に感染している—サニスチャレキャンプで

●食糧
サニスチャレのキャンプで出会ったフルマヤ・ピスワさん(30)は、生後4カ月の三友カンガちゃんに乳房をふくませている。どことなくカンガちゃんは元気がない。聞けば、フルマヤさんの結核が感染したという。

ここなら安心だが…
15カ月の二女とカンガちゃんを二人で育てている。「国に機。センターでは、定帰っても、だれも頼る期前に5歳下の児童人がいない。ここでの健康診断や栄養診断たら安心です」

●自立
ネパール最南端部・ジャパ郡ティマリのブータン難民キャンプ。フェンスなどの囲いは何もない。同行した国連難民高等弁務官事務所(UNHCR)のスタッフの説明がなければ、茅葺きの家の外見と山村の集落と区別がつかない。

一回り大きい家に入るとサリー姿の女性が10人、布を手織りしている。ウマ・アチャカリさん(28)が「最初は非政府組織(NGO)から材料を提供してもらってたんが、今は自分たちの婦人会で買って、カトマンスの店で約を包」という。

「最初は非政府組織(NGO)から材料を提供してもらってたんが、今は自分たちの婦人会で買って、カトマンスの店で約を包」という。



キャンプそばの干上がった川底で、道路工事に使う小石作り。これで難民たちはいくばくかの現金を手に入れる—ネパール・ティマイキャンプで

祖国の土 踏む日を夢見て

ウマさんは1992年2月、家族とともに来た。キャンプの男性と結婚。長女(3)と2人目の子どもがおなかにいる。本当はすべてが配給を受けようという生活は嫌。でも、この教育と仕事で、帰った時に自分なりに働かせている。

隣の建物では、大人の識字教育が行われていた。14歳以上40歳以下を対象に5つの教室があり、ネパール語、英語の読み書きを毎日3時間、1年半で

●支援
キャンプ内は、風が通る。雨が降り、濡れた衣類の臭いが漂う。配給はネパール赤十字社、ネパール職業訓練や識字教育を英国の国際NGOのOXFAMが、それそれ担当。飲料水の給水と下水処理、家の竹などの提供をル・テルワルドサポート。専門的医療はAMDA、シニア医師連協議会、ネパールが援助。運営は難民自身が行っている。

責任を持ち、ネパール政府と国連開発計画(UNDP)による。成人識字率(75%)、世界食糧計画(WFP)など、国連機関とNGOの援助を調整している。

NGOの役割分担は、難民の保健衛生、医療はセー・ガ・ザ、食糧や衣類の提供はネパール赤十字社、学校建設と教育はカリタスの家が、警察と並んでいる。家の前には、流し穴がある洗い場。竹で作られたトイレの小屋が2軒につき、200ほどおきには水道栓もある。ネパールの9割の人が住む農村部では見られない環境衛生施設が、すべてあることに驚いた。

キャンプはUNHCRが荒れていく大地。難民による伐採で環境問題も起こりつつある。集めた木をキャンプへ運ぶ女性。サニスチャレキャンプで

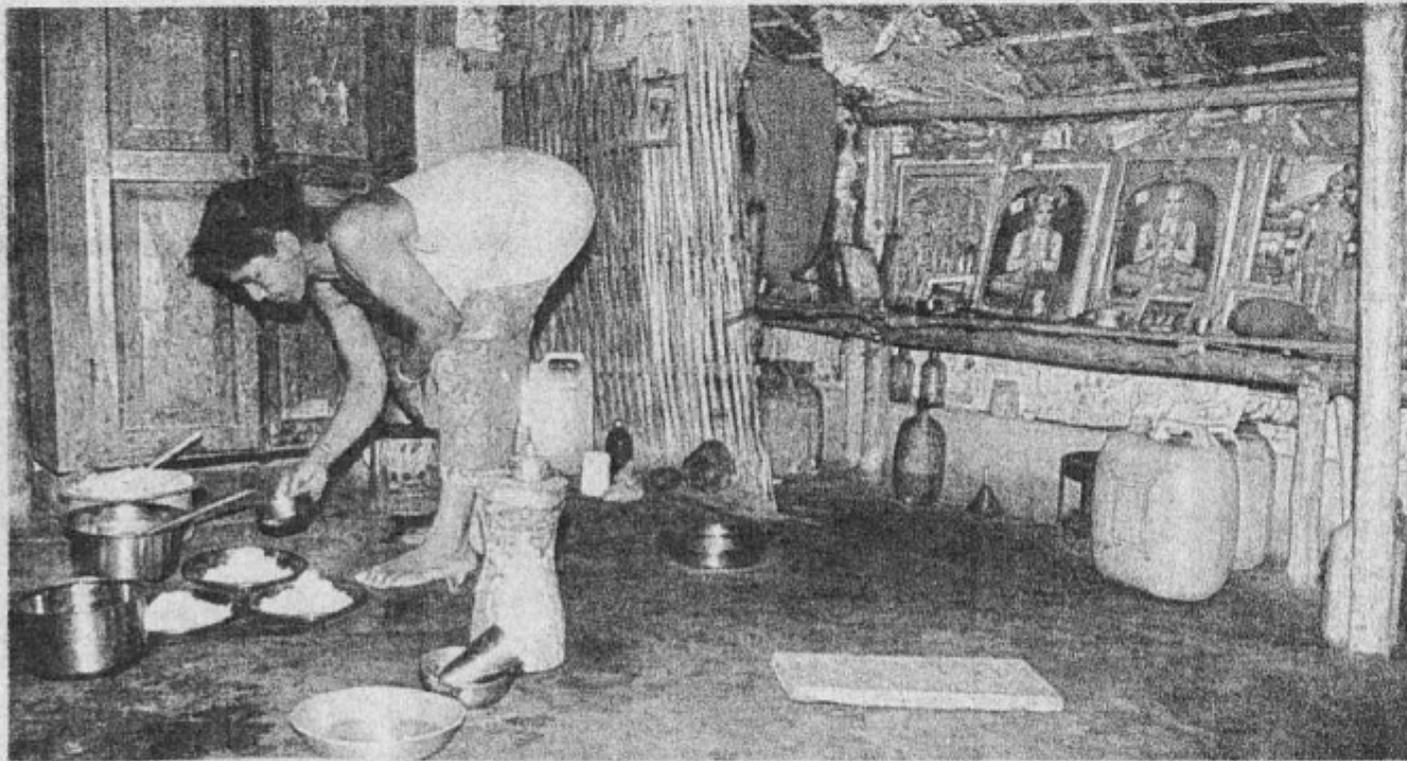


●食糧
土砂降りの雨が降る中、食糧配給のトラックがクドナバリのキャンプの集会所に着いた。難民への配給が始まる。1日1800〜2200粒になるよう、米が1日当たり430g。豆、砂糖、塩、小麦粉、野菜、スパイス、料理油なども2週間分、配られる。大人も子どもも量は同じ。14人家族と天所帯のアムリ・パタライさん(21)は、93年まで米の質もバラバラだったけど、今は均等に配給されている。食糧不足はない。選べないのが不満。早く国に帰って畑を耕したい」と訴えた。配給は、はかない。もらったものを食べる方がいい—と話した。

大人も子ども同量の配給
週間分、配られる。大人も子どもも量は同じ。14人家族と天所帯のアムリ・パタライさん(21)は、93年まで米の質もバラバラだったけど、今は均等に配給されている。食糧不足はない。選べないのが不満。早く国に帰って畑を耕したい」と訴えた。配給は、はかない。もらったものを食べる方がいい—と話した。

荒れていく大地。難民による伐採で環境問題も起こりつつある。集めた木をキャンプへ運ぶ女性。サニスチャレキャンプで

狭い小屋の中、難民たちを見守るようにヒンズー教の神々が飾られている「ゴールドハップキャンプ」



●教育

「ネパールの人は生活のため、子どもに仕事をさせながら学校に行かせている。これは働く心配がないので、子どもが落ちついて勉強できる。教育レベルも上だと思っている」

自分らの「言葉」を守るために

学生時代の88年、校庭でネパール語の教科書が焼かれるのを見た。「私たちはこの言葉を守るために難民になった。言葉にわれわれの文化、習慣がすべて詰まっています」。熱っぽく話

●ケア

その後、「だけど、本国で禁止の状態が続けば、帰っても失業してしまいますが…」と、少し考え込んだ。キャンプでは、帰国へのめどがつかずに働くこともできない住民の心のケアが大きな問題になっている。UNHCRジャパ事務所のアラン・サランガム事務

難しい地元住民との調整

務所長は「キャンプ内でないのは、大学と仕事の場。大学は毎年65人分を奨学金で確保しているが、周辺住民の仕事を奪うキャンプ外労働は許可できない。しかし、取り締まるのも難しい。周辺住民からは道路や川のインフラなどの要求が続々来ているが、ネパール政府との調整も難しい。特に、キャンプ住民だけが水道があり、病院での無料治療を受けられることに不満は大きいようだ」と頭を痛めていた。

プ生活の中で、難民による森林伐採や不法就労をめぐって地域住民の反発が増大したため、94年から地域住民に対する植林や福祉事業を行う難民地域再生プログラムを始めている。

起こった。ブータン民族衣装の強制的着用や、小学校課程のネパール語廃止なども同時に導入された。ブータン政府は、ドゥルクパ族が国内で少数派になるのを避けるために行ったとしている。

話し、ヒンズー教を信仰している。大量出国は、89年にブータン政府が国勢調査に基づく市民権証明書の提出を義務づけ、それができなければ92年1月までに出国を命じる布告を出してから

いる。現在、9万人以上がネパールの八つの難民キャンプに、3万人前後がインド各地に分散している。ブータン北東部に住む仏教徒のドゥルクパ族とは区別され、ネパール語を

ブータンでは話せなかった自分たちの言葉・ネパール語を学ぶ



母親